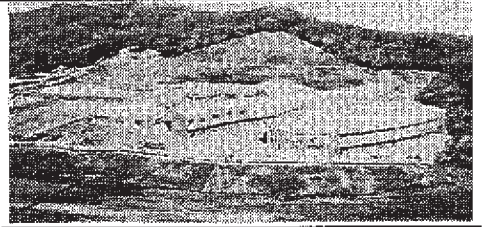




佐 啓



ふる里学会・和田浦 〒299-2725 安房郡和田町黒岩 1,190-1
TEL 0470-40-7227 MAIL fgakusya-wada@bluc.ocn.ne.jp

社会福祉法人 佐啓会
http://www3.ocn.ne.jp/~gakusya/
発行者 里見 吉英 編集者 三股 金利

ふる里学会 〒290-0265 市原市今富 1,110-1
TEL 0436-36-7611 MAIL fgakusya@peach.ocn.ne.jp

出 会 い

山口 喜男

「ふる里学会」との出会いとは、さかのぼること二十四年前、事業団に就職してからのことになります。私と、里見施設長・三股部長とは同期で事業団に入りました。しかしながら、何故か入った年は同じでも、施設長とは二歳違い、部長とは一歳違いでありました。勉学が好きであったのか、大変な苦勞したのかはわかりませんが、そういう年齢差がありました。

それから、長男・次男・三男のような関係が二十四年間、今年度が終わると四分の一世紀の付き合いとなります。愛妻よりも付き合いが長いわけです。(付き合いたいとは、あまり思っておりませんが……) まあ、月日は経ってしまいましたが、

二十四年間の中で、施設長・部長は十年前、社会福祉法人佐啓会を設立し「ふる里学会」を立ち上げました。

「ふる里学会」が開設しましたから、ちよこちよこおじやまして情報を廣くにきいていた次第です。

このような出会いが、幸か不幸かこの四月からお世話になるきつかけとなりました。どちらかというと体育会系、まさしく体育会系となるのでしょうか。徒弟の世界と申しましよう

「思い起こすと」

施設長や部長とのやりとりを思い起こすと、宴席を交えたことばかりが多く、飲んででは夢物語ではと思うことをよく聞かされました。

新人と呼ばれた頃から、知的障害者の福祉界は今後契約の世界になるだろうと話してしました。どうして酒ばかり飲んでいるのに、いつ勉強しているのかと思う程のものがありました。そんなことを、思っている間に、借置制度から、契約制度の大転換となってきたわけです。(今もって不思議である……私の勉強不足なのか……)

その発想たるや、組織の動き方など、眼を見張るものがありました。そこに、またまた、部長が居るわけですから、たまたまものではありませんでした。では、若い頃のエピソードをいくつか紹介することにします。

「組閣」

新人でたびたび飲んで、グチをこぼしあうわけですが、それはどこにもあるようなよくある上司の悪口です。そうした話の中

で、我々同期が数十年前過ぎたら、「おまえは更生施設施設長だ!」「俺は児童施設施設長だ!」などと話していたときです。夢は大きく持たなければだめだと自分たちで勝手に組閣を始めたわけです。(文面の流れから、誰がはじめたかわかりだと思えますが……)

この時、私は大蔵大臣を拝命したわけです。大蔵大臣といえは内閣・国の要、有り難い話であるとお受けすることになりました。任期中、秘書には給与を払い、ヤミ献金もなく任期半ばでの更迭もありませんでした。

しかしながら、これが大きな勘違いでした。大蔵大臣と言えは銀行関係の主管であります。銀行といえは総理とくるわけです。つまり、私の仕事は会計役でありました。それから、二十年近く会計職をさせていただけのこととなりました。

なお、この時、施設長は内閣官房長、部長は防衛庁長官であったと記憶しております。このように、人材登用の力はみことなものでした。

「3Kクラブの誕生」

我々新人の中で、更生施設に配属された九名で設立したというか、勝手に作ったというか、要するに宴会クラブのようなものです。

なぜ、3Kクラブなのか、当時は「敬愛」・「啓蒙」……もうひとつは、忘れてしまいましたが……

なぜならば、本当の理由は、人生、「ケツケツケ」と笑い飛ばして生きて行くと言うのが、3Kの由来であったと思えます。

このクラブでは、昭和五十年代当時流行していた、お揃いのトレーナーや、ボロシャツなどを作り、胸には「3Kクラブ」の刺繍、ワッペンなどを縫いつけ、職場を闊歩していたものです。(思えば、あまりに若かった……)

宴席の度に、「出張はスーツで行け」だの、「髪を剃れ」だのの機を飛ばしておりました。それが原因で、色々と、もめたこともありました。ごくまじめな、サラリーマンでありました……

先輩からはいやがられ、後輩からは煙たがられ更生団に、3Kクラブありと言われたものです。(そう思っているのは我々だけかも……)

その時、六十代になっても七十代になっても付き合いで行こうというのが、当時の合い言葉でした。今でも集まる機会を設けたり、また、自然発生的に全国に散らばった仲間が集まり、その当時の話題を酒肴にし、飲むことがあります。

このクラブの存在は、私の大きな財産であり、よき仲間と出会えたものだと思っております。(その当時こそ迷惑をおかけした皆さん、この場をお借りし陳謝申し上げます……)

そんなこんな交流から、出会った人と一生懸命付き合っていくことの大切さや、その人を

大事にしていくことを学んだような気がします。

「中古新人」

こうした二十四年の流れの中で、この四月より三股部長の後任として三月末まで千葉県社会福祉事業団を退職いたしました。お世話になることになりました。

四月一日に辞令をいただいたからの感想を一言。

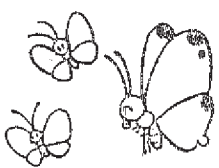
とにかく忙し、先が読めないから、ますます忙しいわけです。(温かく包まれていた事業団に居た方がよかったかな……と弱音がでるほどです)

「人生楽ありや、苦もあるさ、くじけやならない」の水戸黄門のフレーズを口ずさみ、寮生の皆さんや職員の皆さんに迷惑をおかけしながら、早、ひと月たつてしまいました。

しかしながら、中古新人の意地を見せるべくがんばるつもりです。おられます。(老花現象と戦いながらの、奮戦をこうご期待と言ったところか……)

このように戦戦兢兢ばかり先行してしまい、多分、有り難迷惑の方が多と思います。その点は、ご容赦ください。

(指導課長)



笑 顔

松崎 明美

2002年(平成14年) 5月1日(水)

昭和五十八年一月十九日、元氣な男児、英雄が生まれました。五ヵ月後、初めて熱性痙攣を起しそのとき以来、病氣と病院との長い付き合いが始まりました。一度発作が始まると、痙攣が重積となり、三十分から一時間は止まらず入院、そんな生活が何年間か続き、四歳の時に肝機能障害となり、主治医の先生から、この一週間を乗り切ればと言われたときもありました。発作は相変わらず止まらず病院へ、おまけにいたずらして、怪我をしては病院への生活が続きまして。

車椅子であることなど、いろいろお話をして、一つ一つ答えてもらいました。その上で月に一度ショートステイで預けてみようと思ひ、学舎にお世話になることにしました。初めは英雄も不安だったようですが、そのうち楽しくなってきたようです。しばらくすると月一回から二回になりました。学舎に行く前日は、「明日が学舎だよ」と言う、朝早くから起きて三三三としていますが、学舎で眠くなってしまうといった具合でした。それでも英雄は自分なりに楽しんでる様子です。親の方も初めは緊張していましたが、少しすると安心して預けられるようになってきました。

高等部三年になると、今まで漠然としていた問題が一つ一つはつきりしてくる度に、学舎の職員の方に相談し、その度に的確なアドバイスが頂けるので、相談することが多くなりました。ある時、学校の先生から身体障害者施設を見学して下さいと言われ、見学に行きましたが、何か足りない気がしたまま帰ってきました。次のショートステイで預けるときに気が付きました。学舎と比べると作業をすることもなく、また、話をしている事もなく、施設そのものが病院のようでした。車椅子であり、全面介助で大変だとは思いますが、英雄には全く違つて、明るくて、笑い声のするショートステイは刺激になっているように思ひます。卒業が目前になってきたときに、このまま学舎に通えればいいなと思ひました。

卒業後、在宅と思ひていた時に、ショートステイで学舎に通えることになると聞いて、親も嬉しかったのですが、まさか、毎日利用できると思ひていませんでした。昨年春からは、学舎のバスで送迎して下さるようになり、車の好きな英雄には、毎日嬉しくて仕方ないようです。泊旅行や外出などでも、親が付き添うこともなく、良く見て頂いたり、いつも声を掛けて頂いたりして楽しく過ごしています。ふる里学舎に出逢えて本当に良かったと思ひております。これからも楽しく通いたいと思ひています。

数日後、次々と『ふる里学舎』和田浦にも利用者が入所し、活気が溢れてきた。やはり施設はこうでなくちゃ！と、しみじみ感じる今日この頃である。今回、『ふる里学舎』和田浦に配属となり、生涯六回目の引越をした。「住めば都」という言葉はまったくそのとおりで、何処へいてもそれなりに暮らせてしまふのだ。移り住んで、一ヶ月もたつていないのにもう慣れてしまった。前号の佑啓で、誰かが「ネオンはあるのか？」などと心配していたが、それらしきものはあるし充実した毎日を送っている。(笑)

住めば都。和田浦も…？

上田 郷



(松崎 英雄・母)

「おーい！ トイレレットペーパーがないぞー！」
「あの高い電気、スイッチ一つで降りてくるんだって？」
「このでっかい窓は誰が掃除するんだー！」

職員の声が施設内をこだまする。三月末、『ふる里学舎』和田浦に配属となった職員数名で新しい土地へ足を踏み入れた。

全てが新しく、なんだか落ち着かない。落ちて着こうとして深呼吸…。変わらないうい。

とにかく、二が四月から俺の仕事場なんだと自分に言い聞かせ施設内を見て回るのだが、驚きの連続で気の休まる暇もない。一緒にいた同僚たちも皆驚き

を隠せないでいた。しかし、本当の驚きはそれから数日後に起った。建物を建設会社から引渡され、利用者が入所してくるまでの間、何かあつてはいけなかつた。このことで、職員が交替で泊まる事になった。そのトップバッターが私になった。

誰もいない施設に一人で泊まる。ただ、それだけだと思ひてたのだが現実とは甘くなかつた…。日も沈み、ひっそりとした職員室でキーボードを叩いていると、「ふつ」と一瞬電気が消えた。山奥だから、電気が届きにくいのかなあと思ひていると、すぐにまた電気が消えた。なんだ、なんだと思ひていると今度は本当に真暗になった。

しかし不思議な事に何秒かするとまた明かりが点いた。とりあえず、施設長に電話連絡を入れる。一通りその出来事について報告し指示を仰ぐ。そこまではよかった。その後に冗談で「いやーきつとそれはお化けの仕業だよ！」と氣をつけて明日の朝まで生き延びるんだぞーと言つて電話は切れた。そこから恐怖との戦いが始まった。「なにいつてんだよ、お化けなんかいる訳ないじゃないか」と自分に言い聞かせる。しかし、そうはいかない。

小さな物音がするたびにドキドキする蚤の心臓。テレビをつけても恐怖は消えない。幽霊が出たら…助けてくれる人もないし…どうしようと思ひていた割には早くに寝てしまった。

翌日、地元から通つてくる職員が、「昨日、雷が落ちて停電ありましたよね。」と話し掛けてくる。「は？」「停電？」「雷？」そうか！

普通に考えれば落雷による停電だということに気づくはず。しかし、施設長の一言が脳裏に焼きつき離れなかつた。純な自分。あー情けない。

今回のように、誰もいない施設に一人で泊まるという事はもうないと思う。施設がオープンして利用者が入つてくれば三六五日絶えず人がいる事になる。それを考えると、この経験は貴重なものであつた。

数日後、次々と『ふる里学舎』和田浦にも利用者が入所し、活気が溢れてきた。やはり施設はこうでなくちゃ！と、しみじみ感じる今日この頃である。今回、『ふる里学舎』和田浦に配属となり、生涯六回目の引越をした。「住めば都」という言葉はまったくそのとおりで、何処へいてもそれなりに暮らせてしまふのだ。移り住んで、一ヶ月もたつていないのにもう慣れてしまった。前号の佑啓で、誰かが「ネオンはあるのか？」などと心配していたが、それらしきものはあるし充実した毎日を送っている。(笑)

編集後記

(指導員)

ふる里学舎が市原と和田浦に分かれ一ヶ月…。この一ヶ月は嵐のように過ぎ去つていった。今まで一緒に働いていた職員が、離れた場所でも仕事を。家族から親戚に…。離れていても「共に楽しく」をモットーに、いつまでも家族のような関係でありたいと思ひつづ…。佑啓四十五号をお届けします。今年度もどうぞ宜しくお願いします。 霜崎 深雪